

福島松韻書

西嶽華山廟碑 延熹八年(一六五年)

漢隸の中でもすぐれたものの一つで、昔から有名であるが、惜しいことに、明時代(一五五五年)に地震のために壊れて、碑は現存していないが拓本によって知ることが出来る。均整のとれた筆致は見ごとであり、礼器には及ばないかもしれないが、八分の書法の極致を示していると評されている。
礼器・曹全・史晨・乙瑛・孔宙など同時代の碑です。



澤 通 氣 雲 行 雨

澤 旁の四の上に一画あります。偏を少し小さく、横画三本目に八分をしっかりと入れましょう。

通 旁は背勢ぎみに書いて、偏は伸びやかにしっかりと八分を入れましょう。

氣 一画目の書き方は独特で、短く書いて米を安定した形にしましょう。

雲 一画目も八分に見えますが、下の横画が最も長く、一画点を入れて横画を長く書いてここは八分をしっかりと書き入れましょう

行 イの三画目はしっかりと突き止めて旁の八分バランスをとれるように書きましょう。

雨 一画目の横画に八分を入れて、左右の縦画は引き締めるように書いてバランスをとりましょう。



今年一年間、褚遂良が書丹（朱砂にて直接石に書すること。）した、雁塔聖教序を勉強していきたいと思います。

大の最終画は、隸書の調子で書き、少し重々しくしました。

全体に逆筆で書いてみましたが、空間の取り方が、原帖の様に大きく見えない。

最終画の横線は、逆筆で入り（蔵鋒）、筆先が最初は下部、次に中心に、最終は上にくる様に運筆しております。この書き方は、高校時代に教わった書き方です。（蔵鋒―起筆に筆の穂先をあらわさぬこと。）

最終の点は、本帖では打つのと打たないものがあるが、通常の楷書では点を打つ。唐楷書字典の中でも、点がないものも多数ある。

見事な結体で、中々この様に書けない。空間の取り方が難しい。

偏はかなり大きく少し左に傾く感がある。最終画で全体のバランスを。



小田原翠浦書

『明清書道図説』にて、青山杉雨先生が、知的な陰影といわれた董其昌、その傑作といわれる「秣陵帖」を学んでいきたいと思えます。

秣 偏の三画目の縦画 二画目から受けてのびやかに。

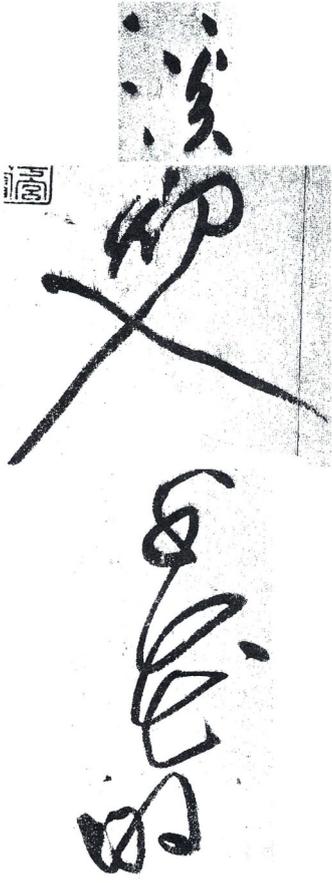
陵 偏から旁、離れている線まで、気持ちは続いていきます。

旅 前の字と同じ 前の線から受けて 入り、筆管を立てて書きました。

舎 一画目 筆管を立てて ゆるぎない線から二画目に続けました。

送 力強く。

會 ゆったりとした一画目、二画目 腕を大きく動かして書きました。



井上峰雪書

黄庭堅《一〇四五—一一〇五》北宋時代
江西省出身 字は魯直 号は山谷

草書「李太白憶旧遊詩卷」から彼の草書の中、最高の傑作と評され、その筆法は、大小 強弱 長短 肥瘦の全てを包含し、心の赴くまま変幻自在に展開する変化の妙、緻密かつ複雑でダイナミックな世界を感じながら、それらに対応できる運筆の多様性をこの作品に原帖は自由で楽しい書Ⅱの臨書(形臨・意臨)を通して、一年間楽しく学んで参りましょう。

(溪、初めて入れば 千花明らかに)

扁と旁、ポンポンと。点画の夫々の違いに留意。全体軽やかに面白く。

丁寧にして、次への連綿一氣に。

右の払い、波打つような特有の揺るぎの運筆。左右の払い、長短の制約もなく、自由表現の感。

右上がり、小さくとも存在感ある力強い線質。

前の字(千)からの連綿の繋ぎ強く、滝の流れの如く一氣に、花の字形、右上り、送筆中跳ねの弾力で、筆を捻りながらうねり感を。リズムミカルに、爽快な風を感じて楽しく運筆。

扁と旁の間、空間の取り方に留意し、つなぎ直線的に右上がりに結ぶ。

明 花 千 入 初 溪